

「イエスの最初の弟子たち」

マルコ福音書 3章 13節 - 19節

- 1、この箇所は、マルコ福音書の著者の編集の言葉(13-15)と元来の伝承(16-19)とから成る(「12人を任命し」という言葉が14, 15と2回出てくる理由)。伝承の引用とはいえ、「弟子の選び」という発展的な話の最後を「このユダがイエスを裏切ったのである」と暗い部分を削除しならったマルコの執筆の意図は何であったのか。
- 2、マルコを「人の流れ」という視点で初めから読むと、イエスを囲む人々の流れに、二つの方向がある。一つは、人の輪が広がる流れ。1章のシモンとその兄弟アンデレの弟子への選任。2章では、「汚れた霊に取り付かれた男のいやし」があって、イエスの評判はガリラヤ地方の隅々まで広まって、人々が集ってくる。3章8節「ガリラヤから来たおびたしい群衆が従った。また、ユダヤ、エルサレム、イドマヤ、ヨルダン川の向こう側、ティルスやシドン辺りからもおびたしい群衆が集って」くる。もう一方はイエスを取り囲む人々の、イエスとの関係が絞り込まれてくる流れ。3章13節「イエスは山(聖なる場所、群衆から離れる事を意味する)で、これと思う人々を呼び寄せられ・・・12人を任命された」。群衆から弟子へと流れは狭くなる(12は象徴的数字)。そこにイエス「引き渡し(「裏切り」は意識、支配当局によって逮捕される事を意味する術語で、過去をを述べる表現)」の記述が話の締め括る。これは弟子が選ばれ、伝道が発展していくなかで、イエスの逮捕が暗示されている。マルコが福音書全体を見通して、イエスの受難と死に向う物語を構想していたと思われる。つまりマルコ福音書の思想が出ていると思われる。以後イエスへの「弟子の無理解」というテーマがマルコを貫く。
- 3、「任命」という言葉について。口語訳は「立てる」、文語訳は「挙げる」。原語は大変広い意味をもつ言葉。「ポイエオー」は「作る、こしらえる、(建築)の建てる、原因となる、実を結ぶ、備える、任命する、行う、為す、行動する」。英語ではmake, do。これは主語になるものの力を示す言葉。イエスの人間関係のもち方を意味する。最後にイエスを「引き渡す」「弟子の無理解」を含めて、「任命」がすすめらる。「任命」は「十字架の死」につながってゆく。他方、「神の国」は病める人々、貧しくされた人々、抑圧された人々の間に広がってゆく。この二つの流れは二重性をもつ。「弟子の選び」の深い暗示である。弟子は広ガリの「宣教の展開(喜び)」に与かり、絞り込みの「宣教の孤独」に与かる。それは「宣教の二重性」である。
- 4、福音観書店の松居直さんは「本を作るが、作られた本の半分しか売れない。売れた本の半分しか読まれない。読まれた本の半分しか理解されない。理解された本の半分は誤解されている」という。ここには「出版人の喜び」と「出版人の孤独」が同居。
- 5、「弟子の選び」の4つの項目(14-15)。①「挙げられること」。役目の授与。②イエスの側におく。訓練。③「派遣して宣教させ」。言葉による人格関係の働き。④悪霊を追い出す権能。人間性を奪う社会の諸力への戦い。初代の教会の働きが反映されている。現代の教会人がイエスに従うこともその本質では変わっていない。私たちも、これらの役目を宣教の二重性において自覚しつつ、励んでゆきたい。